

おばあちゃんの家

2004(平成16)年11月23日鑑賞<OS 劇場 C・A・P>

★★★★



監督・脚本=イ・ジョンヒョン/出演=キム・ウルブン/ユ・スンホ/トン・ヒョフィ/ミン・ギョンフン/イム・ウンギョン (東京テアトル配給/2002年韓国映画/87分)

……その夏、サンウ少年がイヤイヤ連れてこられたおばあちゃんの家は、ソウルから遠く離れた山の中。テレビもないし、ロクな食べ物もなく、口のきけないおばあちゃん相手に、サンウはわがまま放題。しかし、山の生活でもいろいろな出来事が……。そんな中少しずつサンウは心を開いていき、ひと夏が終わり母親が迎えにきた時には……。？ 映画はこんな素朴なもので十分。あちこちの座席からは感動の涙が……。

第5章

映画のよしあしは俳優で決まる！

『山の郵便配達』『ウォルター少年と、夏の休日』そして『やさしい嘘』

この『おばあちゃんの家』は、中国映画の『山の郵便配達』(99年)における素朴さ・シンプルさと、ハリウッド映画の『ウォルター少年と、夏の休日』(03年)におけるおじいさんと孫との心の交流そしてまた、フランス・グルジア合作映画の『やさしい嘘』(03年)のおばあちゃんのやさしさの3つを合体させたような映画。したがって韓国版の自然の素朴さ・シンプルさと、韓国版のおばあさんと孫との心の交流をじっくりと味わうことができる。

低予算、スターなしでも大ヒット！

87分の上映中ずっと出ずっぱりの主演は、もちろんおばあちゃんとサンウの2人。そしてそして当然この2人は韓流ブームの中、今をときめく大スターでも何でもない。

『やさしい嘘』で映画に初出演したエステール・ゴランタンさんの実年齢は91歳とのこと。それと同じように、この『おばあちゃんの家』で主演を張った(?)

キム・ウルブンは、映画出演はおろか映画を観たことさえないという77歳のおばあちゃん。またサンウも、数本のCM出演の経験があるというだけの素人だ。さらに、この映画の製作費がいくらなのか知らないが、超低予算であることは明らか。だってどこにも金のかかる要素は見当たらないのだから。

しかし、それでもこの映画は2002年春、韓国で上映されるや大人気を呼び、400万人の観客を動員したばかりか、韓国のアカデミー賞にあたる大鐘賞最優秀作品賞を受賞したとのこと。そんな映画が韓流ブームの今、日本で上映されることに……。

冒頭シーンはバスの中

冒頭シーンは山の中のデコボコ道を走るバスの中。その中に1人、都会風(?)の母親(トン・ヒョフィ)が7歳の男の子サンウ(ユ・スンホ)を連れて座席に座っている。

サンウは「ホントに口がきけないの?」「ホントに耳が聞こえないの?」と尋ね、母親はそれに対してうなずいているが、一体何の会話なのかサッパリわからない。

バスの中はオバちゃん軍団(?)に占拠されているため、にぎやかそのもの。どうも、まちへ買い出し(?)に出かけた帰りのバスらしい……? ある停車所で降り立ったこの母親は、嫌がるサンウを引きずるようにしながら、さらに山の上の方へ……。

次のシーンはあばら家の中

次のシーンは山の中のあばら家の中。ここがサンウの母親の母、つまりサンウのおばあちゃんが1人で住んでいる家。見るからにみすばらしい家だし、このおばあちゃんは口がきけない様子。サンウの母親とおばあちゃんとの会話からわかることは、次のような家庭の事情。すなわち、サンウの母親は17歳の時、1人この家を飛び出してソウルのまちに出て行き、男と一緒に子供まで生んだものの、とっくにその男とは別れてしまったこと。都会で女1人生きていくのは大変なこと。子連れ状態では次の仕事を見つけることすらできないこと。したがっ

て、夏の間だけサンウをおばあちゃんの家で預かってほしいという虫のいいお願いをするために帰ってきたこと……。こんな勝手な注文とちょっとしたおばあちゃんへのおみやげ、そしてサンウ用の食料品である缶詰を残して、母親はそそくさと都会へ戻ってしまった。

さあ、こんな下田舎のオンボロ家の中で、口もきけない皺くちやばあさんと2人で生活しろと言われた7歳のサンウはどうするのだろうか？

サンウはわがまま放題

こんな家の中ではサンウは、お気に入りのゲーム機で遊ぶことしかすることがない。その他にも持参したおもちゃだけを頼りに1日1日を過ごしていた。食事だって、おばあちゃんの作るものは汚いからと、持参した缶詰を食べるだけ。そんな中、頼みのゲーム機の電池が切れてしまった。さあ大変だ。サンウはどうするのか……？

山の中にも若者の姿が

この山は極端な過疎地らしいが、それでもサンウと同じぐらいの年の女の子へヨン（イム・ウンギョン）やその友達チョリ（ミン・ギョンフン）も山の中で生活していた。チョリは山の中の少年らしく勤勉・実直ないい男でサンウにも優しくしてくれるが、そんなチョリに対してサンウはとんでもない悪戯を……。また意外に可愛い（？）へヨンに対しては、いつしかサンウはちょっとした恋心（？）を……。さて、その恋の行方（？）は……？

面白いケンタッキー・フライドチキンのエピソード

電池も切れてしまったし、缶詰も切れてしまった。おばあちゃんが作る食事は食べる気がしない。気を遣ったおばあちゃんから何を食べたいかと尋ねられたサンウは、ケンタッキー・フライドチキンと答えると、身ぶり手ぶりで鶏だということがおばあちゃんにわかった様子。

そこでおばあちゃんは、交換用のカボチャを持ってまちへ出かけて行って、鶏を一羽仕入れて、孫のためにこれを茹でて提供してくれたが……？

おばあちゃんが大変！

翌朝、おばあちゃんが起きてこない。これは、雨の中、鶏を抱えて山道を帰ってきたためだ。風邪をひき熱を出して起き出せないおばあちゃんに対してサンウは……？

それまでおばあちゃんを無視し、罵声を浴びせ、悪戯ばかりしてきたサンウの態度は少しずつ変わり、やがて……？

サンウにも不幸が……？

今日はサンウの「晴れの日」。つまりへヨンの家に遊びに行く日だ。7歳のガキはガキなりに（？）髪形や服装にも気を遣い、プレゼントを持っていそいそと出かけて行った。しかしその帰り道、サンウにはちょっとした不幸が……。

足から血を流し「暴れ牛」に追い立てられ、散々な目にあったサンウは泣きながらおばあちゃんの家へ。そんなサンウのポケットに入っていたものは……？
そしてそんなサンウを迎えてくれたあばあちゃんは……？

おばあちゃん、サヨウナラ

おばあちゃんがサンウに示したのはママからの手紙。やっとママが迎えに来てくれると思うサンウだが、今はそれ以上におばあちゃんと別れるつらさの方が……。まったく字も書けないおばあちゃんに対してサンウが教えた2つの言葉とは……？

バスに乗り、「おばあちゃんサヨウナラ」と手をふるサンウの頭の中をいっばいにしていたものは、一体何だったのだろうか。こんな中、映画はエンディングに……。

「この映画をすべてのおばあちゃんに捧げる」という字幕が流れた時には、座席のあちこちから、おばあちゃんたちの（？）すすり泣きの声が……。映画というのは、こんな単純なものでいいんだと再認識！

2004(平成16)年11月24日記